

# activate

## めぐりめぐって

工場が閉鎖になってブライアンは失業した。冬の寒さが厳しくなると、家計にもひびいた。友人たちは皆このさびれた町を出て都会に行ってしまった。だが、ブライアンはその町で仕事を探すと決めていた。そこは両親を葬った土地なのだから。

ある夕暮れ、ブライアンが暗くなりかけた道を古い車で走っていると、ちらほらと雪が舞い始めた。急いで帰ったほうがよさそうだ。そんな時、停めたベンツの脇に老婦人が立ち尽くしているのが見えた。どうやら助けが必要らしい。笑顔で近づいたが、婦人は心配顔だ。(この男は、いかにも貧乏そうだ。安全とは言えない。もし危害でも加えられたら・・・) 警戒心を隠せない婦人に対してブライアンは言った。「助けましょうか。暖かい車の中で待っていて下さい。僕はブライアンです。」

単にタイヤのパンクだったが、こんな田舎で立ち往生した老婦人にとっては一大事だ。ブライアンは車の下にもぐり、指の関節を何度かすりむいたりしながらも、間もなくタイヤの交換を終えた。

ねじを締め上げていると、婦人が話しかけてきて、どんなに感謝していることかと言った。

お礼にいくらあげたらいいかときかれた。ブライアンが助けていなかったら、どんなことになっていただろうかと思うと、どんな額でも払おうという気持ちだったのだろう。

しかし、ブライアンはお金の事など考えてもいなかった。単に困っている人を助けたにすぎない。これまで、自分も大勢の人たちに助けてもらってきた。こうして助けるのは当たり前だし、そのためにお金をもらうなど考えられなかった。

だから、こう答えた。「本気でお礼のことを考えてらっしゃるなら、今度、誰か困っている人に出会った時に、今日のことを思い出して、その人のために何かしてあげて下さい。」

そうして、婦人がエンジンをかけて走り去るの

を見送った。寒く憂鬱な日だったが、家路へ向かうブライアンの心は温かかった。

さて、婦人は少し走った所で小さなカフェを見つけた。ふと、何か少し食べて温まりたいと考えた。さびれたレストランだったが、出てきた若いウエイトレスは、やさしい笑みをたたえていた。婦人の髪の毛が濡れているのに気づくと、タオルを持ってきて拭いてくれた。妊娠しており、しかも臨月らしいが、いかにも大変、などといったそぶりは全く見せず、快活な笑顔が印象的だった。婦人は、貧しくても、見知らぬ人に親切にしてくれる人がいることを考え、ブライアンのことを思い出した。

食事を終えると、婦人は100ドル札で支払った。そして、ウエイトレスがお釣りを取りに行っている間に、そっと出て行った。ウエイトレスがテーブルに戻った時は、すでに車が出た後だった。おつりを受け取らずに客が行ってしまったので、あわてて周りを見回すと、ナプキンにメモがあるので気づいた。それを読んで、彼女の目には涙があふれた。

「ただ気持ちだけです。ちょうど同じように、私も他の人に助けてもらったから。この愛の輪が広がるのをあなたのところで止めないで下さいね—それが何よりのお返しになることでしょう。」

まだ片付けが残っており、身重の彼女にとってレストランの仕事は容易ではない。だが、この一日も切り抜けられた。家に戻ってからずっと、あのナプキンに書かれていたことを考えていた。あの人はどうして私たちにお金が必要だって分かったのかしら? 生活は厳しくなるばかりで、来月には赤ん坊も生まれる。夫がどんなに気に病んでいるか分かっていた。彼女は、隣で寝ている夫に優しくキスをして、こうさざやいた。「すべてはうまくいくわ。アイラブユー、ブライアン」